

# 日本社会党における 佐々木更三派の歴史：

その役割と日中補完外交——曾我祐次氏に聞く（上）



## はじめに——入党までの経緯とその後

曾我祐次です。どうぞよろしく。実は、12月16日は私と船橋成幸君（本誌661、662号「私からみた構造改革——初岡昌一郎氏に聞く」参照）の誕生日で、同年同月同日生まれなんです。私は明け方だというから彼の方が少し先に生まれたようで、ちょっと兄貴かもしれません。もう年を取りまして、声は大きいのですが耳はだいぶ遠くなりました。

最初に簡単な略歴から入ります。私は江戸っ子でありまして、昔は東京府荏原郡字三木（ミツギ）というところで生まれまして、三木小学校、正則学院中学、それから戦争中を含めまして、日鉄富士製鋼所の青年学校の助教員みたいなものをやりました。8月12日に召集が来まして、3日間の兵隊です。それでも兵隊になりました。8月15日が終戦でありますから、私は8月12日、東部第64部隊に入隊しました。戦車砲部隊で、いきなり千葉の九十九里へ連れて行かれました。恐らく本土決戦の急造の部隊だったと思います。現役が半分、予備役が半分の混成部隊です。

敗戦後、帰りまして早稲田大学第二高等学院に入りまして、いきなり入党したわけではなくて、地域で青年同志会という青年運動、それから何しろみんな活字に飢えていましたから、「始原林」という貸本屋をやりました。同時に母校の三木小学校同窓会の再建といったことなどを約2年やり、社会党へ入党したのが1947年11月で、私の地域の品川支部に入りました。入りましたら外から見ているよりは中身はめちゃくちゃで、いきなり青年部長をやれというようなことになりました。それで青年部長として学習会をやれとか機関紙を出せとか、いろいろなことを言い出したら、あいつは共産党の回し者ではないか、と思われたぐらいの状況でございました。

品川・大田は旧選挙区東京第2区でありまして、松岡駒吉（1888～1958）、加藤勘十（1892～1978）の2人が同じ選挙区でやることになりました。加藤勘十さんはそもそも愛知だったので、後から話しますが、鈴木茂三郎派の意向に反して片山内閣で労働大臣になりました。そういう関係でその後の選挙で落選して、

本稿は、法政大学大原社会問題研究所の研究プロジェクト「社会党・総評史研究会」の第5回と第6回研究会の記録である。研究会は、2012年12月9日（日）と2013年2月24日（日）に法政大学市ヶ谷キャンパス80年館7Fの会議室において開催された。出席者は、12月が雨宮昭一、五十嵐仁、木下真志、鈴木玲、中根康裕、浜谷惇、船橋成幸、細川正、栢田大知彦、2月が雨宮、五十嵐、岡田一郎、木下、園田原三、中根、浜谷、船橋、細川、栢田であった。事前に、曾我氏宛に提出した質問に答えていただいた証言（本号）と、その後の質疑応答に分けた。また、読者の便宜を考慮し、中見出しを付した。（木下真志）

これが今、民主党の赤松君のおやじの赤松勇という、なかなか演説のうまい若手代議士に選挙区を押し出されて、やむを得ず品川へ来て、そして品川・大田の東京第2区で加藤さんも選挙をやることになりました。

戦前、城南で加藤さんは労働運動をやっていますから全く縁がないわけではありませんが、そもそもそこは加藤シヅエ（1897～2001）さんが立候補していたわけで、シヅエさんは全国区へ回って旦那さんをそこへ入れた。誠に麗しい話でございます（笑）。

そういう支部でありました。つまり当時、左右で言えば右派が非常に強かった。そういうところへ私が飛び込んで、支部の機関紙をつくれとか学習会をなぜしないのかなど、いろいろなことを言い出したものだから、あいつはどうやら共産党の回し者ではないかと（笑）。松岡さんの子分に当たる石塚幸次郎さんが当時、支部長で、品川の区会議員でした。その方は人としては非常にいい方なのですが、私は、自分で2年間の空白期間を置いて自分で社会党を選んで入りました。入ってみたらその支部に鈴木派と言われた大柴滋夫（1917～1998）さんがいらっしやいました。当時、彼は品川支部のことよりも、むしろ加藤宣幸君と一緒に社会党本部のほうの仕事もやっておりました。

なぜ私は2年間の空白があるかということ、私は男4人、女6人の長男です。うちのおやじは米屋から魚屋になり、寿司屋になった。しかし、戦争で寿司屋はやっていけない。弟、妹は多い

し貧乏のどん底の家庭の長男で生まれておりまして、そういうことから私の考えはその頃から左がかった。つまり、不公平をやめて平等にいきましょう。当時は列車に一等車、二等車とありましたが、なぜそういうものがあるのかということ子どもながらに感じたわけです。

ただ、うちのおやじは、後に東亜連盟の指導者になる石原莞爾（1889～1949）が小隊長のときの入隊だそうです。おやじは福島県会津若松出身です。石原莞爾は山形県生まれですが、会津の連隊の小隊長に士官学校を出てすぐ回ってきたわけです。そのときの薫陶か、それ以後もおやじは石原莞爾と時々文通などをしていたようです。

私にお金がなくても行ける学校の陸軍士官学校へ行けというのが、おやじのたつての願いでしたが、幸か不幸か、中学3年ごろから目が悪くなり、軍隊は近眼を採りませんからそこへは行けない。大学へ行くには金がない。ぐずぐずしているうちに徴用が来るというようなことで、たまたま日鉄富士製鋼所の青年学校の補助教員というのがございまして、おれを使えと言ったら使ってくれたものですから、そこにしばしました。

青年学校でも当時、軍需工場の場合、国から金が出て、実際の鉄砲、三八式歩兵銃を30丁ぐらい持っておりました。私の仲間に横山三平君というのがいて、こいつが当時、極右団体の尊攘同志会に出入りをしていて、私が青年学校の先生をやっているころ、そこへ顔を出さない

#### 曾我祐次氏略歴

1925年 東京府品川区生まれ  
 1947年 第二早稲田高等学院在学中に、日本社会党品川支部に入党  
 1949年 早稲田大学政経学部中退  
 1952年 左派社会党本部書記局入局  
 1955年 統一後の日本社会党に入局  
 1960年 日本社会党本部退職

1961年 日本社会党東京都本部書記長  
 1967年 東京都知事選挙で、美濃部亮吉当選  
 1967年 日本社会党東京都本部委員長  
 1969年 日本社会党本部組織局長  
 1976年 日本社会党本部企画担当中央執行委員  
 1982年 日本社会党本部副書記長  
 1986年 副書記長辞任  
 2000年 日中友好21の会代表 現在に至る

かと言うので、3回ほど、東大赤門前から入って右側にある寮で、いわゆる「昭和維新」なるものの話を聞きました。だから手っとり早く言えば、国家社会主義者の端くれみたいなことを戦前に経験をしていました。

青年学校の生徒でわりあい優秀な者は当時、皆予科練を希望しました。私は、予科練は行けば死ぬのだからやめておけという話をしたのですが、どうしても行きたいという人に、今から思うと6名か7名だと思いますが、推薦状を（青年学校から出さないと受験できない）書きました。それが戦後ものすごく私の心に残っております。結果的には書いた者は終戦間際でしたから死にはしなかったもので、そこのところはまあまあだとは思いましたが、いずれにしても自責の念は非常に強くありました。だから働く者・平和の党という意味で社会党を選びました。

別に、家に国家社会主義的な書物がたくさんあって読んだというわけではありませんが、マイン・カンブぐらいは読みました。そんなことで2年間のブランクを経て自ら選んで社会党へ入ったということで、いきなり本部の書記局へ入ったわけではありません。支部へ入ったわけです。それからアルバイトも、いろいろなことをやりながら1947年11月に社会党へ入党して品川の青年部長になりました。1951年ごろに労働者同志会へ行って事務をやれという話が来まして、労働者同志会で事務局的なことをずっとやりました。組合幹部をそのころから若いながら知っており、それは私のその後に非常に大きな影響を与えたと思います。

1951年10月に党は平和四原則（講和四原則）で、青票か、白票かで分裂しまして、私は右派の強い支部でしたが左派社会党の品川支部に属し書記長になりました。どうやって飯を食べていたかという、アルバイトと「始原林」という貸本屋で何とか飯を食べておりました。女房

が肉屋という土建屋さんが私のシンパにいて、無給で私の下で書記をやりたいと。しかも本人は建築屋ですから、結果的に戦火で焼けた私の家を造ってくれました。安藤利信という人ですが、その後、品川の区会議員になり、都会議員選挙には落ちて辞めましたが、当時後援者みたいな格好で私についてくれたという幸運にも恵まれました。

私が本部へ入ったのは社会党が左右に分裂した1952年、左派社会党本部の書記局に機関紙と労働局という担当で入りました。当時、総務部長だった大柴さんが私を本部へ入れたことになるわけですが、実はこのとき、機関紙をやっていた久保田忠夫君が結党直後から本部にいた古い諸君とぶつかって書記局裁判みたいなことで辞めることになって機関紙をやる者がいないから、おまえは学生時代、新聞をやっていたから来いということもあったのかもしれませんが。それが1952年10月でした。私は当時本部の書記をやりながら品川支部の書記長もずっとやってきたわけです。

### 社会党再統一後

次に1955年、統一社会党の書記局になりまして、機関紙『社会新報』を担当していました。加藤宣幸君がここへ来てお話をしているようです（本誌650、652号「構造改革論再考——加藤宣幸氏に聞く」参照）が、彼は私が「社会新報」を終わった後、『社会新報』の仕事を始めたわけです。『社会新報』という名前をつけたのは55年統一直後で、淡谷さんと私です。私は青森県出身の淡谷のり子の叔父さんである淡谷悠蔵さん（衆議院議員）の実家に招かれて、青森のリンゴ村に2～3回行ったことがあります。

その後1960年に私は本部を辞めて東京都本部へ行きます。その間、本部の書記局をやりながら都本部の機関紙部長、組織部長、組織局長

をやって、そして60年の安保が終わった段階から都本部へ専従の格好で行きました。当時の都本部は東京都でありながら、左派の専従者は島上善五郎（1903～2001）の甥の佐々木幸一郎君1人で、そこへ私が強引に入って、61年2月に都本部の書記長になり、以後都本部の書記長をずっと続けて、美濃部の当選の後に委員長になる。その間、都議会で45名を取って第1党になり、美濃部亮吉（1904～1984）を出して都知事のポストをはじめ取る。

都本部の委員長になったが、新左翼の内ゲバもあり、東京で社会党の支持が急に落ちて、一気に国会議員が2名になりました。事前にわかりましたのでそのとき調整のため現役議員を切りました。それをやらないとみんな落ちてしまうので辞めてもらったのですが、「人切り曾我祐次」と盛んに言われたのはその頃です。「革新官僚」出身の帆足計（1905～1989）も私自身が首を切った1人です。

そして、69年8月に、都議選挙で議席を大きく減らしましたので、私は責任をとって都本部を辞めました。そのすぐ後、中央委員会でもたまたま組織局長のポストが空いていたので、佐々木派が強引に割って入って私が組織局長になりました。組織局長になって1年経つか経たないかの70年11月に、成田・江田の委員長決戦がありました。このときに船橋君が私の対立候補として出て、私が見事落選をして船橋君が組織局長になる。どうも船橋君が成田さんの票を取り、私がちょうど江田さんの票を取ったということで、大差で私が負けました。以後6年間、丸っきり浪人です。

社会党の中央執行委員、つまり専従中執というのは、もちろん役職に就けばその役職の長だからそれなりの力を持てますけれども、いったん党内選挙で負ければ、下までばちゃんと落ちて浪人です。そういうことになっていますから

なかなか大変な職業ですけども、私はそれ以後満6年、なかなか出られない。なぜ出られないかということ、企画担当中執以外に私が立候補しても落ちるだろうと当時の佐々木派は判断した。企画担当というのは社会党が共同戦線党の証拠として、2人いて、右1人に左1人。これがずっと守られてきたわけです。企画担当中執に出そうとするとそこにもっと偉い人が現れて、派内で「仕方がない、今回はあきらめろ」。また回ってくるとまた同じ人が出る。そういう状況が裏から手を回した格好でありまして、満6年、この間、浪人を続けました。成田知巳委員長・石橋政嗣書記長が5、6年続いて、この間に協会派は『日本における社会主義への道』をつくりましたから、『道』のあと押しでかなりの力を持ってきました。この頃が向坂協会派が一番いい時期だったんじゃないですか。

協会が少し出しゃばり過ぎて、党中党、あるいは党内党的な存在になって、総評からも強い文句が来て、そろそろ協会規制が始まる頃でした。そこで河上（丈太郎）派も含む、広い意味では当時の政構研の川俣健次郎さんが企画担当を自分が引くからおまえが出るということになり、結果的に左右で出ていたポストに、私が左派出身であるにもかかわらず出ることになり、そのときの相手が岩垂寿喜男（1929～2001）君でした。彼は僕が入っていったので、あなたと一緒に仕事はできませんからとすぐ辞めます。自分の衆院選挙に専念すると言ってすぐ辞めました。そして機関紙をずっと担当していた協会派で専従の大塚俊雄君がもう一つの企画担当中執になって、以後企画担当中執は私と大塚ということで、左右1・1の形が崩れたということでした。

そして飛鳥田時代になって、船橋君が横浜市から委員長付中執という形で入ってきまして、飛鳥田さんと多賀谷書記長の時代はずっと私は

企画担当中執で、この間はかなり辣腕を振るいました。多賀谷さんはとてもいい人ですが、本来書記長にはあまり向かない人なので、企画担当はそこについているからちょうどいいので、かなり私にご相談があったのでいろいろやりました。そのうちに企画担当中執がなくなりまして、それを副書記長二名にしようということになりました。いろいろな経緯があったのですが、私の先輩が若干いて、これは森永栄悦君がやるべきだと言ったのですが、ちょうどそのとき書記長争いが江田派の内部で起きて、平林剛(1920～1983)さんを、社研から、つまり佐々木派から出さざるを得なくなった。平林さんは当時から心臓が弱くて、政審会長ならやらせてもらうけれども書記長は無理だということで辞退したのですが、みんなが来て、何が何でも平林を出せ。そうしないとまとまらないというわけです。その前に飛鳥田さんの思いつきで、熊本若い馬場昇君を書記長にしたけれども、それが全然だめになったということがあって、結局、平林が書記長になる。平林がなった以上、おまえが出るべきだ。おまえが副書記長になって援助しないわけにいかない、という話になって、結果的に私は森永君を置いて副書記長になりました。

その後はずっと副書記長でいきまして、1986年、「新宣言」をつくった後、石橋委員長のとくに二度目のダブル選挙(死んだふり解散)で負けまして、私と森永君が専従中執の中から2人、自発的に辞任することになりました。当時、議員集団から専従中執は横暴だという批判が相当出ていました。その批判が正しいかどうかは別として……。以後今日まで私は社会党、社民党員でございますが、一切役職には就いておりません。以上、長くなりましたが私の主な経歴でございます。

### 佐々木派誕生の経緯

次に、佐々木派の誕生(1960年)の経緯について申し上げます。

長く委員長をやっていた左派のトップである鈴木さんがお辞めになる。辞めるのは、安保闘争の前段でご存知の通り西尾末広さんの問題が起き、結果的に西尾さんが除名になり、ここで民主社会党が誕生します。その責任と年齢もあって鈴木さんが委員長を辞めることになりました。

そこで、その後任をどうするかということになり、当時最大派閥の鈴木・佐々木派としては二つ問題がありました。1つはポスト鈴木委員長のどうするかということです。河上さんと浅沼さん2人の名前が何となく上がっていましたが、我々としてはこの際、逆さまみたいなことになるが、浅沼をどうしても委員長にしたい。浅沼さんをポスト鈴木に持ってこようということで、佐々木さんが中心になって浅沼委員長擁立ということになりました。結果的に河上さんと浅沼さんが対立候補として争うという、人間関係から言えば誠に好ましくないことになりましたが、鈴木派は浅沼さんに無理やり引き受けさせて浅沼さんを担ぐことになりました。選挙の結果は僅差でしたが、浅沼さんが委員長になりました。

もう1つは、これから浅沼委員長の下でこの社会党を何とか大きく立派にしていくために佐々木派が一致団結していかなければいけないというので、このときに決めたことがあります。それはヌマさんが、まさかすぐ殺されるとは思っていないから、ヌマさんが委員長であることを前提にして、書記長は忙しい役目だから2年ずつやって、順次有名人をつくったほうがいいということも含めて、鈴木さんが指名したのが1番は佐々木更三(1900～1985)、2番が山本幸一(1910～1996)、3番が江田三郎

(1907～1977)。成田知己(1910～1979)さんは正確に鈴木派に入ったことがない。ないけれども何とか成田さんを引っ張り込んで、その次に成田にするということを鈴木・佐々木派の会合で決めまして、そういう順番で浅沼を支えて書記長を佐々木派で取ってやりましょう、ということになっていました。これが後の構造改革、その他の問題に結果として不幸な、悪い影響を与えることになったと思います。

それから、佐々木派の問題と同時にもう一つは社会主義研究所です。佐々木派のほうは、正式名称は「社会主義研究会」。その前の鈴木派は皆さまご存知の通り「五月会」できたのですが、「社会主義研究会」という名前を正式につけたのは55年体制に入る段階です。鈴木・佐々木派は書記局が前から力がありまして、この社会主義研究所(通称くれない会)を同時に作りました。このくれない会は、それ以前は左派社会党の中では、私に言わせれば書記局民主化運動の集まりでした。社会党本部の中には終戦とともに本部へ駆け込んで本部をつくり上げる重要な役割を果たした我々の先輩がたくさんいます。その後、左派社会党が選挙のたびに大きくなるにしたがって財政も増えてきたので、大学教授の方々の推薦やあるいは国会議員の推薦等々で書記局員がどんどん増えました。当時は公募制はやらなかったと思います。

私は左派の中でも自分で「中古」と言ったのですが、中古が私で、最初から本部に来ていた古い先輩の諸君、そして後から来た諸君、ちょうど私がその真ん中で、左派社会党時代、野溝勝(1898～1978)さんから代わって書記長が和田さんになる少し前に「くれない会」ができたわけです。だから出発は書記局民主化運動であるわけです。古い者が議員のところへ回っては、書記局に入ってきた若い人達を、あいつはこうだ、あだといろいろ言うわけです(笑)。

それで若い諸君がのびのびできない。私は入党したのがちょっと古いし、本部ではなく支部で飯も食わずに、給料ももらわずに一生懸命やって上がってきたので、旧いほうも私については一目を置かざるを得ない。そういうところから出来上がったのが「くれない会」です。

名前は「くれない会」とつけましたが、うちの鈴木・佐々木派は金がない派閥で、何にもくれないから「くれない会」(笑)。もう1つは、当時、赤マントか何かを着た「くれない探偵団」というのがはやっていて、それと掛けてかっこよくいこうというので「くれない会」と言ったのですが、それを統一の段階で「社会主義研究所」と改めて名前を確認しました。つまり社研とは違う。専従の書記局は書記局としての矜持と独自性を持つ。しかし協力はする。もちろん社研と協力関係には立ってはいるけれども、独自性を持つという意味で、あらためて社会主義研究所イコール通称「くれない会」が再出発したわけです。

どんな人がいたかということ、広沢賢一、笠原昭男、大下勝正、とちゅうから代わりますが高沢寅男。そして小山哲男、深田肇、渡辺みち子、後藤茂、貫井寛、早川勝、宇都宏昭、谷洋二、行川清、加藤久雄、だいぶ死んじやいました。中山皓司、押田三郎、清田直、松村正照(順不同)等々、とにかく書記局の中では一番の大人数で約20名ぐらいいました。

### 佐々木派の政策と役割

次に、佐々木さん(佐々木派)は、どういう日本を築こうとされていたのでしょうか、というお尋ねについてです。佐々木さんはあえて言えば、当時の左派の4つの目標、平和、独立、福祉拡大、国民生活向上。最初は「的」は1つでしたが、2つでもいいと途中で言って、アジアとの連帯、「社会主義的・的政権」。ただしこ

これは実際はそうですが、社会民主主義イコールで「社民」という言葉を使うことを佐々木さんはきらっていました。鈴木さんも私の知っている限りにおいて「社民」という言葉はあまり好きではなかったようです。

「社民」と言うと、日本の場合、全部がそうではありませんが、戦前は裏切り者、戦争協力的な立場をとった人々もそこに含まれているという意味において、「社民」という言葉を左派の方では使いにくい。中身的にはいきなり社会主義政権ができるわけではないということはみんなわかっていながらも「社民」という言葉がなかなか出なくて、「社会主義的・的政権」という日本語をつくらうとしていたと思いますね。

佐々木派で中心となった方は、佐々木更三、山本幸一、江田三郎。成田知巳さんはかっこ付きで、ちょっと別です。この人は結局、入りませんでした。ほかの派閥にも結果的にはゆきませんでした。次に安平鹿一、島上善五郎、山花秀夫、伊藤好道、岡田宗司、北山愛郎、椿繁雄、労農党にいて少し遅れて入りますが木村禧八郎。こういうところが戦前・戦中派を含めた人達です。

戦後になりますと、下平正一、安宅常彦、広瀬秀吉、米田東吾、平林剛、藤田高敏、大柴滋夫、小笠原二三夫、野々山一三、小林進、加藤万吉、清水勇、串原義直、中村茂、森下昭司、戸田菊雄、鈴木和美、富塚三夫、沖田正人、早川勝、深田肇、栗村和夫、清水澄子等々が佐々木派の主要なメンバーだと言っていいと思います。

理論、政策を一緒にしますと、江田さんという人は理論、政策もやるし、組織もやる万能選手です。山幸さんは国対委員長を長くやって「国対の山幸」と言われているぐらいの人でしたが、中小零細企業の全国組織をつくって、実績を上げました。伊藤好道（1901～1956）さ

んは統一綱領をつくった佐々木派の一人です。どちらかという理論家です。岡田さんも戦前からのそういう方です。木村禧八郎さんは経済を中心とした政策。小笠原、野々山は当時の労働者同志会で鍛えられて議員になって社研に来たような人で、どちらかという労働対策みたいなものが得意です。藤田、大柴はどちらかという党運営をやってきた方です。また藤田さんは佐々木さんの下で日中の仕事を一貫してやってきました。

社研として発足した当時、書記局から出たのは若手の広沢賢一さん、高沢寅男さん、深田肇、清水澄子の4人です。高沢さんは社研というよりは途中から協会のほうへぐっと力が入って、事実上、社研を出た人です。清水勇が国対で活躍するなど若手中堅でおりました。そういうことで社会党の左派系縮図みたいな形が社研と言え言えたわけで、そういう意味で80年代半ばまでは左派の中で主流派的役割を担ってきたと言えると思います。

### 江田組織改革の提言を東京で実践

次に、「江田さんとの路線論争が長い間続くことになりましたが、佐々木派との相違点は何かですか」という質問についてです。これはなかなか難しいのですが、江田さんはここで今まで述べたように、鈴木・佐々木派、特に「鈴木派」と言われているところから関西を中心に相当囑望された政治家で、「構造改革論」が始まる前、55年統一が終わった後、党の機構組織改革の問題を中心に問題提起をいたしました。党の近代化として、1つは、社会党のすべての問題を定める大会代議員の国会議員の自動代議員制をやめて、国会議員も下部組織の信任を得て大会代議員になるという提起をしました。もう1つは専従中執です。最初は我々の先輩などはオルグ制度でまず全国オルグになって、それから専

従役員になってまいりましたが、江田さんの組織局長時代になってから専従中執を置こう。特に組織の分野、そして政策、運動の分野では議員中執でも十分こなせないで、そこを中心に非議員専従中執を置くことを提案したのも江田さんです。

また、それまでは党の直接の部門であった青年部・婦人部を、青年部は社青同（社会主義青年同盟）、従来の青年部は青年対策部にして、実態は社青同に自主性を持たせて青年組織をつくった。婦人のほうも婦人対策部に直して、大衆的な婦人会員＝日本婦人会議をつくって、党の影響力を拡大していかなければいけない。それから中央本部だけではなく、各都道府県本部、あるいは大きな総支部、支部にも専従書記、あるいは専従役員を置ける方向を出す等、機構改革委員会をつくって提案し実行にうつしました。

55年の左右統一をしたすぐ後だったので、組織をあまり表に出すと右派を刺激するから、「機構」という言葉を先に使って「機構組織改革委員会」にしました。これは対右派の関係で出てきた言葉で、本当は「組織機構改革委員会」ですが、そういう配慮もしながら江田さんは党の近代化・組織化の方向を出しました。この間は鈴木・佐々木派も異議はないので、私などもまさに江田さん一辺倒で、江田さんの下で東京都本部を根本的に建て直そうと思って東京へおりてやったぐらいです。

ちなみに申し上げますと、東京都本部は左右の争いの中から職場の集団入党を認めて、ようやく左派が優位になりました。それまでは東京都本部は伝統的に右派が強かったわけですが、それを集団入党の形にして労組から入れました。入れたのはいいのですが、私が初めて東京都本部の大会代議員に品川支部から選ばれて見たら、半分以上が東交の制服を着た人が座っている。これでは東交党だ。これでは首都東京で

過半数の都・国会議員を取るには限界がある。やはり私が都本部に専念して、この東京を建て直さなければならぬと思ったのが、実はそれがきっかけでした。江田さんが提起した組織機構改革を文字どおり東京でやりましょうというのが、私が途中から東京に専念していく第一の理由でございました。

ついでにちょっと東京のことを申し上げますと、私が東京で書記長になって何をやるかと3つ考えました。一つは党の近代化・組織化で、事務所はいらない。都庁の中のどこかを借りておけばいい。ともかく専従者を増やして、東京の各支部にオルグを置く。それから組織・運動担当を専従役員にする。そのために都議団から金を取る。区会議員からも市町村会議員からも金を取る。私の書記長の役割は実はそういうことで、各級議員の党費をあげて金を取るということで、オルグ団を置いて、都議そして中選挙区で何とか過半数候補者を立てるようにしたい、ということで懸命な努力をしました。

もう一つは共産党へのコンプレックスではないのですが、社会党の機構、組織、研究、学習等を見ると共産党にはかなわない。したがって、遅ればせながら党学校をつくったり、きちっとした研究機関をつくったりしながら、やっていかなければならない。

3つ目に、当時、東京区長は公選ではありませんでしたから、東京を下から自治を拡大するには区長公選運動をやらなければならぬ。区長公選運動をずっとやりまして、結果としては美濃部知事の終わり頃ようやく区長が公選になったわけです。

私が直接東京で知事選挙にかなり中心にかかわったのは四回で、有田八郎（1884～1965）が2回です。1955年党の統一直前の知事選挙に左右社会党が共闘の形で協力しながら有田を出して第1回目の選挙。そして有田の2回目。



知事選挙は、同一候補としての2回はだめですね。2回目の方がお金も使ったし、たくさん運動もやったけれども、結果的には2回目は票が伸びなかった。3回目が兵庫県知事の阪本勝(1899~1975)。この人は「知事3選すべからず」というスローガンを出して、2選で辞めた人です。河上グループの1人ですが、この人をお百度を踏んで連れてきて、阪本勝の知事選挙をやりました。これは結果的に公明党の票だけ負けました。

その後、都議会で自民党の議長選にからむ汚職がありました。議長は交際費はじめ待遇がいかによかったかです。お金をまいて議長になるほど議長がよかった。当時のうわさとか見方では、国会の議長より都議会議長のほうがはるかにいい。金は使い放題と言われていたぐらい交際費に恵まれていたのですが、これが議長選汚職に引っ掛かった。金をまいて、2人からもらったやつを「ニッカ」、3人からもらったのを「サントリー」と言って、「ニッカ・サントリー汚職」事件があり、この機会に何とか都議会を解散させようと思って懸命の努力をしました。

当時、田中角栄(1918~1993)が幹事長になったばかりでしたが角栄というのは当時からなかなか見事なもので、「共産党も賛成ですか、曾我さん」と私に言うわけです。共産党は最初、自民党が悪いことをしているのになぜわれわれが辞めなければいけないのかと言うから、こういうときに辞めて選挙をやらなければ永久に都議会で自民党の過半数を割ることはできない。そのときは民社党も話ができていましたから、おまえさん方がやらなければやらないでいい。おれは社会党と公明党と民社党とで何が何でもやると言ったら、共産党も最終的には仕方がないから我々の仲間に入ることになったので、それで、野党が全部そろっていると言いました。

当時、地方自治法に地方議会の解散規定がないわけです。これは戦後の自治法の不備の一つだったのでしょう。それで衆議院に3日、参議院に3日ぐれば6日で決めると田中角栄幹事長はそのときはっきり言いました。成田書記長と一緒に私が行った時で、これはなかなかの野郎だなと思ったのですが、結果的に解散して、選挙をやることになって社会党が45名。過半数は60ですから過半数には届きませんでした。自民党は65名だったのが一気に36名に落ち、社会党が議長を取りました。議長を取って議長の交際費をうんと減らしたら、冠婚葬祭にまで事欠く始末になり、議長になった人(大日向篤次)は大変でした。

45名の議員からぼくが議長に左派を選ぶか右派を選ぶか、みんな固唾を飲んで見ていました。私は右派の大日向を選んだ。その人と実川弘という武蔵野から出た都会議員が5期か6期で同期で、左派のぼくが右派を選んだということでみんなちょっと驚いたのですが、その後、都議会の運営が非常にうまくいった。議員でない私が書記長や委員長をやって45名をおさえるというのは、なかなか大変なことです。

最初、書記長になった頃、私は議員団の総会にも入れなかった状況でした(笑)。そうなんです。おまえさんの来るところじゃないと。しかし、それは私一流の強心臓でどんどん入っちゃって、そのうち曾我がいなきゃどうにもならないというふうになって、野党第一党というのは一番いいですな(笑)。議長を取って、私は毎日、議長室の後ろへ行っってはソファーに横になって、公安条例をどうやってやめさせようかと。当時、公安条例廃止が社会党の方針だった。これは、警視庁は本当にやると思って青くなりましたよ。それで警視庁が公明党へ行くようになった。ぼくも若かったから、ああいうことはあんまり急がないで、すぐに動かないほう

がよかった。もう少し機が熟すのを待てばよかったけれども、そういう思いで公明党に話をした。

公明党は、当時は龍年光（1921～2007）が都議会の幹事長で、初代の創価学会政治連盟の事務局長で、2代目戸田城聖の次。宗教の方は池田大作、政治の方は龍。龍さんは品川の都議会議員でした。私は品川出身だから前から知っているのですが、一生懸命にこっちへたぐり寄せて、龍さん半分そうですかと。社会党は公安条例廃止と方針を出しているけれども廃止ではなくて改正で、いつでも、どこでも集会ができるという形をとればいいではないか。そのうちおたくも戦前、邪教と言われることがあった通りで、いつやられるかわからない。、全国から公明党・創価学会員を大動員しても、国会のところに来ると請願デモになって、2列か3列にされてしまう。これでは物理的に力が出ない。安保のときもそういうことでみんな苦労している。だから公安条例を直すのだといたら、龍さんは相当気持ちが動いた。動いたらやはりそれが警視庁へ伝わるわけです。それから警視庁の総務部長が公明党の控室へ毎日来ていると私に報告がありましたが、あまり急ぎすぎでまずいことをやったなと思いましたが、若さからのそういう失敗もございました。それが東京の頃のことです。

### 構造改革論争をめぐって

「1975年に、佐々木さんは『社会主義的・的政権』を発言されるなど、江田さんと共有する考え方もあったのではありませんか」というお尋ねについて。

私から見ると、江田さんもまずいことをしたなと思うのですが、構造改革なら構造改革という問題提起をなぜ佐々木派の中でやらないのか。佐々木派の中に持ってきて、当時そこでやればそれなりに評価できたと私は思っていま

す。私は都本部へ行ってからも「くれない会」の会合にはできるだけ出ていましたから逃げるつもりはありませんが、都本部の仕事がものすごく忙しいので後に残った諸君が社会主義研究所（くれない会）を運営していたのですが、くれないの代表的な人が最初、江田さんのほうの貴島さん、森永さん、加藤さん、船橋さんたちとどうやら構造改革の研究会に出ていたようです。そのことは私にも報告がございましたが、私はその研究会に出たことはありません。当時、私はもう本部にいないということもあつたし、都本部も忙しかったからそこには出ていないわけです。ところがやっていくうちに佐々木派から見てこれはどうかな、ということになったのでしょう。みんな引くことになってしまった。

でも、関係した人たちは鈴木茂三郎さんの時代は全部鈴木派ですから別に佐々木さんとそんなに悪いわけではないので、江田さんの直系といわれる貴島、森永、加藤君らが当時、鈴木さんから佐々木さんに派が替わったわけだから、佐々木さんのほうになぜそういう問題を持ち込まなかったのか。持ち込めばぶち壊されると思ったのか、そこら辺がよく私にはわかりません。ただ構造改革の勉強会を始めてきて、いよいよそれを党の機関に提起するというときには、江田さんは自ら佐々木派を出た格好で、江田個人の責任で出すという形になったのではないかと私は思います。

どこにその行き違いがあつたのか知らないが、佐々木さんには私は後から聞いたけれども、江田君からそういうことの相談があればみんなに相談をして、佐々木派として、つまり従来の仲間同士としてどうするか、ということを決めたが書記局先行でやって、それが江田さんが私から離れるような結果になったのではないかと、言っておりますが、そのところがいまだに私にはわかりません。佐々木派へ持っていった

が断わったというような格好がないまま、江田さんが党の機関にその問題を諮るというかたちが生まれたと思います。

そして、最初は61年だったと思いますが、構造改革論が出る。出したのが『月刊社会党』で、これに対し総評がすぐ反応して、それに対する反対の立場の論文を出すということから入った、ということだと思います。

江田さんがこのとき佐々木派の中に出した場合、佐々木派がそこでこれは受け入れるべきではない、受け入れない、ということになったのか。それではだめだから江田さんが自分で単独でもやるというので江田ビジョンと同時に江田グループをつくっていくことになると思うのですが、どうもそこところは今もって私にもよくわからない。党の機構・組織改革というものを出してもそれは鈴木・佐々木派が受け入れて、私などはそれを東京で一生懸命やろうと思っているのに、なぜ構造改革の問題をまず佐々木派のグループの議題にしなかったのか。既成事実をつくってしまった格好で江田さんがこの問題を持ち上げてしまった、というのがどうも実際ではないか。そこにまず溝ができたというふうにも思います。

断わっておきますが、鈴木さんが委員長を退くときに、1番が佐々木、2番が山幸、3番が江田、4番が成田という順の書記長だと言ったけれども、佐々木さん自身は書記長には向かないということを自分はよく知っていたし、山幸も国対委員長でいいという考えなので、結果的には江田さんになったわけです。だから江田さんが書記長になったらなった上で、鈴木・佐々木派と相談してやるならともかく、そこところは私は東京へ行ってしまったということもありますし、別に逃げるわけではありませんが、非常に残念だと思います。

ただ、はっきりしていることは、「くれない

会」と言われた社会主義研究所の広沢も高沢・笠原など主だった者は最初は研究会に出ていたが、危ないから辞めて帰ってきたという話は聞きました。それでどういう扱いにしようかと相談した結果、それは実際の闘争の応用動作で、運動の中で大いに生かしていくことはいいのではないかと。左右が統一したすぐ後のことで、西尾問題、浅沼のテロによる死などがあり、これ以上構改派グループのいう綱領にかかわる問題を新たに提起するのはどうか。党の統一が不完全ながらできているのだから、いまさら綱領に代わるような戦略論は避けて、これは運動上の戦術規定にしようということになって、構造改革は戦術にとどめるべきだ、ということをお次の大会で提案したところ、それが通ることになったわけです。

このところは構造改革案を進めて、これを党の戦略にしようとする人の側から見るとそこに何か食い違いができたというふうにししか考えられない。それとも最初から佐々木派はこれには乗ってきそうもない。だから新しい江田グループをつくって党をやっぺいこうという考え方で出したなら、これはこれでまたやむを得ないということになる。だから江田さんが鈴木・佐々木派からなぜ出て行ったのかがいまだにはっきりしないわけです。非常に残念です。構造改革論争が一段落して、そして「道」ができた後、今度は佐々木さんも江田さんも一緒になって地方遊説をやるという動きも出たが他方、大会を開くと、江田だけではなく佐々木に対しても協会の方から聞くにたえないヤジが飛ばし、結局は同じような立場に置かれてしまったわけです。

もう1つ申し上げますと、そこで戦術ということで一応決着をつけたにもかかわらず、さらに江田さんが「日光ビジョン」を出した。これはメディアには当時、受けたかもしれないが、

余計、間違ったことになったということが言えると思います。

戦術でやるということの裏返しで飛鳥田さんから代議員として理論の委員会提案があり、これが結果として「道」まで行くことになるわけです。これも飛鳥田さんの本当の気持ちではないと思いますが、党に大会直属の社会主義理論委員会をつくって、資本主義なら資本主義分析をやったらいいではないか。そこで大いに議論しろと飛鳥田さんがぶった。それで戦術を決めた後、ぼくもそれに賛成した。しかしこれで資本主義分析というものだけで終わらせてはいけないと思ったのでしょうか。だから理論委員会をちゃんとつくって、その長に委員長を辞めた鈴木さんになるわけです。そこで資本主義分析をやっていたということだった。だから資本主義分析だけをやっておけばよかった。ところが資本主義分析に続いて内外情勢の分析、それから闘い方となって、過渡期は急ぎ、半ばプロ独裁（ある種の階級支配を認める）の「道」になってしまうわけです。

そのときの書記局で中心的メンバーだったその構革三人男が理論委員会から引いたかという、そうではない。貴島正道さんなんかは最後まで行ってしまった。それで鈴木さんに頼まれたと言う。これは貴島さんの本（『構造改革派—その過去と未来』現代の理論社、1979年）に書いてある。要するに、構造改革は戦術だと決まって、大会ではこっちに置かれてしまった。だけど改めて資本主義分析をやりましょう。それは必要ならやってもいいけれども、分析は分析でそれだけにとどめておけばいいのに、さらに入っていくものだから、だんだん協会派がその上に乗って、当時のモスクワ61年綱領の方向をにらんで……。

向坂逸郎（1897～1985）先生には一番いいところだった。日本共産党とソ連共産党はあまり

よくなって、これは向坂先生自身が言っているとおおり、今までは間接的だったけれども、何とかソ連共産党の研究所と直接お話ができるようになったものだから欲が出て、結果的に「道」になってしまった。そのように私は思うので、これは清水慎三（1913～1996）さんではないが、「不幸な出発」と言わざるを得ないと思っています。私としては、当時の社会党の全体の流れ（60年安保・浅沼さんの死、三池の総括がない）のなかで構造改革論の戦略としての提起は少し無理があったのではないかと……。

だから、私が構造改革派に恨みを買うようなことをやったか、どうかと思うんです（笑）。やったとすれば、確かに大会を止めたことは間違いないから……。でも止めたのは構造改革がいい、悪いではないんです。まだ共産党に党籍のあるやつに理論を聞かなければ社会党はやっていけないのか。そんな社会党に誰がしたと、成田さんと江田さんの前に『読書新聞』をぶついたら、議長が田中織之進で、黒田派の解放同盟出身ですが、この人は気が短い。大会ががたがたとすると、「休憩」とやる（笑）。それでぼくが演説をしたら騒げ。騒げば必ず止まる。止まればこっちが勝ちだというのでやったら、止まった。

そうしたら統制委員長が黒田寿男（1899～1986）さんで、直ちに統制委員会が開かれて、何だ、おまえたちはというので機関紙の関係者が呼ばれてやられてしまった。だって内容が同じものを「評論員」というかたちで出すというのはいけません。ぼくはたまたまそういうことを止めろという演説をやっただけ……（笑）。演説は、今はもうだめだけど、マイクなしの街頭演説で鍛えたから当時は割合うまい方だと思っていて、ポイントはこころ辺だと思ったので止めてしまった。大会を止めたなら勝ちなんです。だから、それであきらめればいいいわけです。資

本主義分析は分析でやろうと言うんだから、そこはそこでやってもらったらもう少し違う答えができて、「道」に進まなくても済んだのではないかと思う。そういうことですが、私がタッチしたのは要するに止めて、戦術だとしてしまったこと…。

しかし、そのときの書記長選挙で佐々木さんは負けて、それで江田さんが勝つ。社会党のおもしろいところだね（笑）。それで構造改革は戦術で収まったが、江田さんは書記長になって、佐々木さんは落ちる。そこら辺は書記長への順番はちゃんと決まっていたし、黙っていれば佐々木派全体も江田書記長になっていくと僕は思っていたのに、そこのところは完全にボタンの掛け違いがありました。

#### 「社会主義的・的政権」論とその後

1955年統一がありまして、ずいぶん苦労して統一綱領を作りました。そのあと江田さんが組織改革、組織という言葉は、ちょっと右派を刺激するから、機構改革がいいというんで機構改革委員会を作りました。国会議員の自動代議員制というものを外しまして、国会議員も一定の基礎組織の推薦がなければ代議員になれないと。そしてどちらかといえば、活動家を主体にする党をつくる。そういう機構改革がありました。社青同とか婦人会議とか、党の青年婦人層を外郭組織として広範に組織する。それが江田さんの機構改革答申によって決まったわけです。

「社会主義的・的政権」は佐々木さんが委員長になった段階で使った言葉ですが、最初に「社会主義的政権」と言っただけでも、もう一つ「的」を付けなければだめだご自分で判断したのでしょう。我々が教えたわけではございません。これは佐々木さん自身の発想で、社会主義政権として「的・的」と2つ付けるということです。

この辺は江田さんとよく話をすれば、この段階では日光の江田ビジョンはともかくとして、私は「的・的政権」と江田さんが考えた行動からいくとそんなに中身が違うというものではなかった、かと思います。ところが資本主義分析から入ったはずの「道」のほうはどんどん進んで運動論に入り、最後は政権奪取のプログラムに入って、取った政権はできるだけ早く社会主義に行くから力を持たなければいけない。

「道」は「プロレタリア独裁」という言葉はないけれども、「的・的」ではなく、社会主義政権はすぐに共産主義のほうに向かって前進しなければいけない。この間は短ければ短いほうがいいという権力移行規定が入ってしまった。こいつは社会党の従来の構造改革論争からも超えてしまった。左派綱領がそうだとさえいって、左派綱領以上にこの政権は革命政権であって、我々が言う「的・的政権」ではない。後にここのところが批判され、やがて1986年の「新宣言」へ変わって行くわけです。

しかし、この「道」は決まってから数年間、成田・石橋執行部は協会ペースの中でがっちりと全野党共闘で進みます。自民党内紛で社公民がどうかしなければ、日本の政治はどうにもならないのに、まずは「道」の方向になるし、もう一つ、当時、選挙のたびに全野党共闘、あるいは国会闘争や他の運動も同じ選択に迫られるのですが、成田さんは最後まで頑固に全野党共闘でした。ただ成田以後、これが変わります。

私の計算によると、江田さんが党を出て2年後に社公民の政権共闘を党で決めて、入っていくんです。それが1980年で、江田さんが党を出たのが78年ですから2年の差です。2年の差というのは今から思うと非常に残念と言えば残念です。その証拠には江田さんが党をお辞めになるのは、社会党全体が全野党共闘という名による社共から社公民に変わる2年前です。2

年前に江田さんが出た。そのときの体制は、実は政権構想としては社公民以外ないというのが大勢。共を入れたのでは、公と民が逃げてしまうわけだから。それでは大きいほうから順番にいきましょう、ということになれば社公民以外ないんですよ。

だけでも共産党とも全体としての共闘は否定しない。だからまあ、虫がいいんだけど、大衆運動、自治体闘争あるいは首長の選挙とか、そういうところはいいが、中央の政権問題になると共を入れたら公と民が逃げてしまう。

いずれにしても江田離党は社民連という形で残り、以後江田さんがおつくりになったものがいつも社会党のまわりについて回っているという何だか皮肉なような結果にならざるをえなかったという思いが、私の率直な構造改革論争に対する見方です。その見方は決して私だけではないと思うので、当時の全国の党の活動家の大部分は、やっぱりそういう思いではなかったかと思えます。もう少し党全体のことを配慮してやれば、もっと違った結果が出た。もう少し早く、つまり党の社民化といいますか、そこへたどり着くことができたかもしれません。それは2周遅れのランナーといわれる1986年の「新宣言」をまつ、ということになるのです。

#### 曾我さんと中国との関わり

「曾我さんと中国とのかかわりの契機は何でしたか」というお尋ねについて。経緯は1964年、私は団長で初めて中国へ行くのですが、社会党活動家代表団という名称で、11名の当時の社研の地方組織の書記長、あるいは組織局長みたいな人を集めて。私は64年、東京の書記長でした。中国へ初めて行くわけです。そのときに同時に佐々木更三さんの団、岡田春夫さん、それから黒田寿男さんの団、北海道の団、それと私の団と、五つが北京で集まりましょう、と。

みんな、これは左派です。

64年というのは佐々木さんが江田さんと勝負をして、書記長選挙で負けて浪人中ですね。鈴木さんのあとを受けた佐々木派としては、何とか江田派に一矢報いにゃいかんというような気概もあって、そういう党内状況を踏まえて左派の各派訪中団が北京に行った。最初から毛沢東に会えるとも思ってなかったけれど、いろいろ連絡をして毛沢東と会うことになりました。

私としては、ともかく鈴木・佐々木派の全国活動家を集めて。東京の書記長だったから団長になったのですが。大下勝正君が事務局長で、この人は社会党本部の政策審議会にいて、のちに町田市市長になった京大出身の大下が事務局長です。

当時11名の団を率いて北京に行きました。航空運賃より安いことも考えて玄海丸という船でしたが、これは松村謙三さんが乗ってた船で当時ちょっと有名だった。だけど3,500トンぐらいの船で、船足は遅いし、客室は11。だから11名の団にしたぐらいだ。しかも貨客船だから、どこに着くかわからないんだ。福岡説が出たり、大阪説が出たり、いろいろしてもわからない。ずいぶん苦勞したんだけど、最後は千葉県の五井のコンビナートに着くことになっていて、「硫安」を運んでいくことになって。五井に行ったら雨が降っちゃって。その頃は硫安を濡らしたら、肥料だからだめですから。中国はまだ発展途上国の頃ですが、品質管理は非常にやかましいと。雨の中をかついで硫安を運んだのでは、向こうに行って何を言われるかわからないからだめだ。これは貨客船だから貨物のほうが主なんだ。だから皆さん、遊んで来てくれと言うんだが、今日は出られない。ところが見送りに、皆な来てくれたんですがね。どうしたらいいんだと。いろいろ考えた結果、テープをみんな買ってきているから、結局見送り人

がテープを持って帰る。帰って切れたときがさよならと。余談ですが、そういう面白い場面がありました。

上海に向かっている2日目の夜10時頃、米第七艦隊が入ってきて積荷の点検をした。COCOM/CHINCOM（対共産圏/対中国輸出規制）協定があって、その協定に引っかかるものが入っていればだめだと。硫酸ですから大丈夫だったが、3時間ぐらい南シナ海で。波が荒いんですよ、あそこは。3,500トンの船だから、こんなになっちゃって参りました。そして上海に着いた。それが私の訪中の第1回目の忘れられない印象です。

それで毛沢東に会いました。それが最初の関わりです。毛沢東に会って、団長が5分ずつ質問していいということになりました。私は末席の団ですから、いちばん最後に発言をしました。気に入ったかどうか知らんが、返事がいちばん長い。それはなぜかということ、私は毛沢東は当時、文革を考えていたと思うんです。その頃は、劉少奇が国家主席で、毛沢東は党主席。党主席と国家主席は分離していた。だから実権というもの、もう劉少奇にあったんですね。それで当時毛沢東は南方の杭州にある迎賓館に居る。今でも杭州の迎賓館はきれいですよ。

構造改革論というのは、国際共産主義運動の中では当時やはり亜流でした。国際共産主義運動から見ても反主流なんです。毛沢東は修正主義、改良主義反対でしょう。劉少奇主席は修正主義だ、だめだと。だめだと言われているけれど、実際の経済では大躍進政策で自分が失敗しちゃったわけだから。それで劉少奇が出て、少しずつそれをやり直した。64年というのは、ちょうどカジを切り直す少し前のときですから。しかし毛沢東は66年から文革を発動した。おそらく日本の反構造改革派は共産党の修正主義者よりいい、この人達は我々に近いんだと、

そういう解釈なんだね。当時は……。

だから毛沢東の一問一答は、これが本物です。当時これを勝手に写しとって編集して、本にして売って儲けたやつがいるんだ。相談なくやった。よほどそいつを糾明しようと思ったけども、中身は変わっていない。それでやめた。そういう状況の中で、我々は党内で構造改革派と論争をやっているさなかに北京に来たと。ついては、あなたは党内闘争を大いにおやりになった方のようだから、党内闘争について、党の作風について、毛沢東大先生にお話を伺いたい。こう言うと、毛沢東は「そのことについては、いささか自分はものを言う資格はある」と、こう言った。なるほど資格はあるはずだよね、それを専門にやってきたんだから（笑）。そして結局、中共の主導権を取ったんだからね。まずそんな話がありました。

私は率直に言って中国との関係を考えて場合に、私はもう87歳ですから、我々の年代はやはり贖罪（しょくざい）意識はありますね。まず贖罪意識です。贖罪意識は長い戦争を含めて。つまり朝鮮と中国についてはその意識はあった。これは当時、保守派の自民党諸君にもかなりあったんですね。今の若い政治家は贖罪意識というものが、どうしても薄れますからね。

第二は長い交流、3000年とも2000年とも言っているが、3000年だ。長い交流がある。地理的に一衣帯水だということです。こういうことで中国とは仲良くしていかなきゃいかん。中国は共産党だし、我々は社会党なんで、違いは明確にある。共産主義に対する、一定の警戒感を持って行ったことも事実です。だから私は、羽織はかまを密かに入れていった、そういう気持ちもあった。しかし同じ共産党にしても、ソ連のスターリンとはえらく違うなど。アジアの親近感もあったし、多少、毛沢東のやってきたことをずっと勉強して行ったことで、学ぶこと

もあるだろう。だけれどもその反面警戒感是十分持って、自分では行ったつもりです。

それが第1回なので、じゃ、誰がこれを計画したかという、当時の「くれない会」です。社研（社会主義研究所）の諸君が反構造改革派を北京に集めて、できれば毛沢東に会って元気をつけて帰ってくると。そして次の大会で、何とか江田派と闘うんだということが、底意にあったことは間違いございません。そのときに朝鮮にも一緒に行ったんです。朝鮮もまたこれは、話がどんどん長くなるのだが…。

韓徳銖（ハン・ドクス）という朝連（朝鮮総連）の議長がいて、これはその当時のボスで朝鮮労働党の中でもそうとうの力がある。その韓徳銖議長の紹介状をもらっちゃいましてね。それで北京に行ったものだから、その紹介状をそのままにしたのでは悪いと思って、とにかく北京の朝鮮大使館に敬意を表しにいて紹介状を渡した。こういう紹介状をもらったけれど、我々は中国の招待で来ているので、朝鮮は非常に行きたいけれども、またに、と言った。会ったのは代理大使だったかな、平壤はいま国際会議をやっているから忙しい。我々が朝鮮に行きたいために来たと思ったんだね。いや、我々は今度は朝鮮へ行くつもりはありませんから、せつかく韓徳銖議長の紹介状をもらってきたから敬意を表しに来たと言って宿舎に帰った。

あとから代理大使が平壤に問い合わせたら、やはり韓徳銖議長の紹介があれば、それはぜひこちらに連れてこなきゃいかんと強く言われて、今度はその代理大使が慌てて我々の宿舎に来て、「どうしても来てくれ。そうでなきゃ困るんだ」。いや、こっちはいったん断つたものに行くもんじゃないかと思って、最初はボンと断つたんだが、中に入った中国の金蘇城という我々についている友好協会の役員が、どうしても行ってやってくれと。あとからわかったが、その金蘇

城は朝鮮出身で朝鮮戦争のときに貫通銃創を受けた歴戦の勇士なんだ。その金蘇城先生が、今回の中国滞在のプログラムは1週間延びるけれども、中国側はカットしない。だからいいじゃないか、皆さん、日本では忙しく働いているんだから、ちょうど夏休みに入るからいいじゃないか。朝鮮も見て。2つの社会主義国を見て、それはそれなりに勉強するところがありましたから損はなかったのですが。そういう日程も含めて、約1ヵ月間中国を回りました。中国を案内する先は、その頃は決まっていた革命の聖地延安ですね。それからあとは井崗山（チンカン・シャン）、毛沢東の最初の根拠地です。

そういうところを含めて、上海はもちろんだけれども、主要なところを回って……。以後、社会党活動家団を毎年寄こしてくれと、帰りにそういう話になったので、結果的にその窓口を私がやることになって、それが中国との縁ができる最初でございます。私も佐々木派だから、佐々木さんを介したことは介したけれども、連携は、その後の連絡は別に佐々木さんを通してやったのではなくて直接中国とやりました。

最初は対外人民友好協会とやりました。しかし、だんだん廖承志さんの日中友好協会の方に変わって。その後最初のうちは、窓口はみんな日中友好協会でした。そのあとコミンテルンが解散して、中国共産党対外連絡部は日本の場合、交流の第一の候補に社会党を選んだということです。当時河上民雄（1925～2012）さんが国際局長で、私が企画担当中執でかかわって、1970年代末頃からそういう話が出ました。結果的に、今度は中連部（中国共産党対外連絡部）が窓口になり現在まで続いています。

交流4原則を決めて。その交流4原則の中で面白い点の一つだけあるのは、「相互内部不干涉」であります。あとはいつも繰り返される「完全平等」とかいう言葉ですが、「内部不干涉」



というものが重要な一項目として入り、中連部とやるのは、当時は日本社会党がいちばん最初。その次に公明党、その次に自民党です。みんな同じ「相互内部不干渉」というものでやり日本共産党が最後でした。それが1回目の訪中で、そのあと引き続いて長い間、(約四十年)中国と関係ができるわけです。

### 周恩来との会見

「佐々木更三さんは中国首脳と深いパイプをもっていたと思いますが、曾我さんはそれを引き継がれたということでしょうか。」というお尋ねについて。

私が引き継いだということではありません。佐々木さんは佐々木さんのパイプで議員として、あるいは党や派閥の長としてやられたのですが。私は私でまた最初に行ったときから、直接廖承志さんや孫平化さんなど、日本通の方々と北京でお会いしてから。そして活動家代表団というのは、私を経由してやるというふうになったものだから、佐々木さんを引き継いでやったということにはなりません。佐々木さんは派閥の長として、また議員として、大いに活躍をされたと思います。

次に周恩来さんのことですが。周恩来さんと会ったのは、私が役員、前に言った組織局長の時で、1970年に訪中して会いました。そのときには中ソの対立が厳しくなっていて、中国が当時「覇権主義反対」ということを大きなスローガンにして重要視していました。アメリカは「アメリカ帝国主義」という名前がついている。ソ連については「覇権主義」と。だから覇権主義イコールソ連。この頃は相手側の窓口が中日友好協会、必ず共同声明を作らなければいけないことになる。その共同声明作りに苦心惨憺したものです。

このときは成田さんが団長で行きました。石

橋さんが国際局長、私が組織局長、高沢(寅男)君が教宣局長、伊藤茂君が国民運動局長。成田さんは割合に議員ではなくてプロのほう、つまり専従中執を連れて行くのが好きな人で、たまたまそのときもそういう具合になりました。書記局では、これもまたベテランの国際局の館林千里君がついて行った。双方論争の末、結果的に1日延長になって、ようやく第5次共同声明がで上がることになりました。

そのとき周恩来総理は「ご苦労さんでした」と言って、我々の団を招待してくれました。昼間でしたから、人民大会堂でおいしいご馳走と老酒をいただきました。老酒というのはやはり年代物ですから、人民大会堂で周恩来が客にふるまう老酒というのは実にうまいですなあ。

郭沫若さんが中国側の代表団の団長で来ていました。郭沫若さんもお存じのとおり書家であり、しかも酒飲みですな。どっちが強いということ論争がございました。まあ、周恩来は郭沫若が強いと言うし、郭沫若は周総理が強いと言うし、二人で言い合いをしたのですが。そのあと少し真面目な顔をして、周恩来総理が成田さんに「ところで公明党という党は、いったいどういう党なんでしょう」という質問を投げかけてきた。すると成田さんが、「いや、その話なら曾我さんという、ここにいる組織局長が東京の書記長、委員長を長くやって、竹入さんもその頃、都会議員から上にあがる頃から知っていて、公明党のことは私よりもよく知っています。だから曾我のほうから説明させます」となって、私から手短かに公明党の紹介をしました。

1972年ですから国交正常化の2年前ですね。社会党のことは相当知り尽くしている周恩来首相だから、公明党のことをそこであらためて聞いたというのは、あとから思うと「ははあ」となるほど周さんという人は、相当、先を読んで対応しているな、と…。

### 日中国交正常化と社会・公明両党の役割

72年7月に、佐々木さんが周恩来さんに呼ばれて行きます。佐々木さんは国会議員一人、あとは議員でない友好運動をやっているのを2人、合計3人を連れていきます。佐々木さんと周恩来の話、これは一問一答（時事通信）が残っていますけれど、必要ならばその記録はあります。

佐々木さんは周恩来に、本来ならば社会党が政権を取って晴れて日中正常化をやりたいが、なかなか残念だが、力及ばずだと。しかしニクソン、キッシンジャーの訪中もありチャンスが来た。今のチャンスをのがすと、次のチャンスがいつ巡るかかわからん、という話をしました。周恩来さんは、それじゃあ、佐々木さん、あなたはやっぱり正常化のためのお使いに来ていただいたことになっても、これはやむを得ません。社会党が天下を取って来てもらうのがいちばんいいんだけど、今がチャンスだということとはよくわかっている。という話になって、その上で佐々木さんが、それじゃあ、田中総理に何て伝えたらいいんだと。こう言ったときに、周恩来総理は「田中さんがおいでになった以上、田中首相に恥をかかせることはしない、と田中に伝えてくれ」と…。佐々木さんは帰ってそれを田中に伝えた。

それから少したってから竹入義勝（1926～）さんが行くことになるわけなので、当時の公明党の議席数、力関係からいって、何で竹入さんにメモが渡ったか、国交正常化の主要部分、賠償を取らないとか、台湾と断交ですよとか、覇権反対とか。それが共同声明に載っています。そういうメモを佐々木さんに寄こしてもいいだろうし、成田さんに……。成田委員長は非常に親中派で。佐々木さんはそのときは前委員長。委員長が終わった段階です。佐々木さんと呼ぶのはわかるけれども、そのあと成田さんにその

メモを渡してもらってもいいんじゃないかと社会党は思っていたんだが、どうも結果としては公明党の竹入さんに持っていかれた。

社会党は幅広い党ですから、ソ連と非常に近い人もいる。したがって共同声明の主要なポイントのところを文書にして渡したやつが、成田さんに渡せば、さあ、ソ連とうんと近い人が役員にいるということは中国はもうお見通しでございますから、残念ながら社会党に渡すことはできなかった。力関係からいえば、当時の公明党はまだそんなに議席を持っていなかったし、野党第1党は圧倒的に社会党だから。その社会党が長年、日中正常化でやってきたこともよく知っているんだから。それは当然、社会党がもらってもいいはずだったんだけど、実は竹入さんに回ると。というのは当時の社会党の情况からみて、ソ連派もいれば、中国派もいれば、そのどっち派でもないのもいるというのが社会党ですから。やっぱりそういうところに、うちの弱点があった。

公明党は学会の責任者、池田大作（1928～）さんが中国との関係を、創価学会として、あるいは池田大作個人として……。池田さんは中国については、盛んに「個人として」ということを言っております。彼も、最初は布教のつもりで行ったと思います。ちょっと中国ではカント哲学をもじったような「真善利」の創価学会の宗派的な哲学、イデオロギーでは、布教はやはり難しかったと思います。しかし周総理とお目にかかって非常に友好関係を結べた。周さんもそういうことは十分承知をしていたと思います。

竹入さんと池田さんのどっちが主役だったかというので、盛んに競り合いみたいなものがありまして。やはり宗教団体としての、それを背景に持つ公明党の党首。つまり池田大作より偉くなつては困るので（笑）。その後、竹入さん

は委員長をお辞めになって勲章をもらうか、もらわないかという話になった。ところが野党であつても、委員長になると勲章がいいんだね、かなりいいんです。それで竹入がもらわなければ、これが池田大作とまあまあ、一緒にやっていける。もらったらこれ、おしまいよと、新聞記者も見ていた。

竹入さんは結果的にはもらった。…？…この途端に、竹入さんは終わり。中国大使館は非常に困ってしまって、パーティーや何かをやって竹入さんも呼ぶし、公明党も呼ぶでしょう。そうすると竹入さんはかわいそうに、隅っこのほうに一人ポツンといるんだ。それがわかっていから僕は竹入さんのところに行って、あの人は酒はけっこう飲むから二人で乾杯。公明党の代議士が来るから、あそこに竹入さんがいるんだから、あなた方がちょっと行って挨拶したらどう、と言うと…？…なるほどなあ、と思つてね。厳しいね、あそこは。社会党の派閥どころの話じゃないですよ（笑）。社会党は派閥が違つても、そういうところに招待されてれば、一緒に「乾杯、乾杯」やるだけけれど。

### 毛沢東、周恩来、鄧小平と浅沼稻次郎

毛沢東は詩人であり、哲学者であり、しかし女に弱いと。これは毛沢東ですな。何たって3人だからね。最初の奥さんは師範学校を出た学校の先生で、中国共産党員ですな。毛沢東が延安に向かつて長征に出た、その段階で蒋介石に捕まって殺された。蒋介石の軍にね。次の母ちゃんは、長征三千里の過程でずっと一緒にいた。あまりこの人は知られていないけれど、この方は病気で亡くなった。

3番目がジャン・チン（江青）。これは死線をくぐつて、上海から延安まで行ったんだから大変なもんですよ。延安の山肌の洞窟みたいな、当時緑はあまりなかった。そこへ蝶が舞い降り

たような女性がパッと。毛沢東はそれを見て気に入って、一緒に馬に乗つかつてそこらへんを歩き回つた。昔二人で馬に乗つた写真を僕らにくれた。「それは大変だ。あの写真を返してくれ」と言うんだけど、「もうどっかへいっちゃつてないよ」「そんなことを言わないで返してくれ」と、ずいぶん言われたよ。僕も1回しか会つてないしね。

詩人であることは間違いない。書はあまりうまくなかったそうだが、年中墨字で書いていた。それから『毛沢東選集』なりを一通りは読みましたが、独自性を相当持っていた人ですね。師範学校を出た学校の先生、最初は上海に結集した共産党17人中の一人だったけれども、あまり毛沢東は注目されなかった。ポイントは、当時フランス、ソ連、あるいは日本から帰つた学生等のインテリ指導者が都市革命、都市におけるレーニンの革命ですね。労働者、学生、軍隊あるいは農民、こういうもので都市蜂起をやるというんで何回かやりましたけれど、全部蒋介石にやられちゃつた。毛沢東は黙つて見てたな。そのうちにこれは革命のやり方を根本的に変えないとだめということになって、毛沢東の出番が来るわけです。

チンカン・シャン（井崗山）というあの山へ、私は2回か3回ぐらい行きました。あれはちょうど毛沢東の生家のすぐ裏なんだ。だから毛沢東は自分の裏山をよく知つていた。それで百姓にコメかついで上がつてこいということになって、最初の根拠地を井崗山につくつたわけです。以後、中国の革命の主体は農民。その農民を組織するものがパロ軍（八路軍）ということになるわけです。スターリンは嫌いだったそうです、毛沢東を。あれは中国の田舎革命だ、本当の革命じゃないと言つたという話をよく聞きます。

中国の中で最も中国的なものを取り入れて、革命に成功した指導者だと言つていいのではな

いかと思います。「日中共同の敵」は浅沼発言で、結果的に浅沼さんがこれによって刺殺される結果になる発言ですが。この件では、私は一緒にについて行っていません。ついて行った書記は、政策審議会の広沢賢一さんで「くれない会」ですね。広沢賢一さんがついて浅沼さんの演説の書き屋をやったんです。

彼の話によりますと、2つ書いたんですね。アメリカ帝国主義は日中共同の敵というのと、アメリカ帝国主義の批判だけに止めて、共同の敵が演説の中に入っていないもの。それを入れていないところと、共同の敵と言い切ったものと2つ、広沢賢一は出したそうです。で、浅沼さんが「よし、これはこっちで行く」と。共同の敵のほうを、最終原稿にしてもらったので。決して押し付けたわけではないということ、広沢賢一さんは盛んに証言をしています。事実そうだと思いますね。あのときの浅沼さんは従来の河上、いわゆる社会党の中でいう河上派、これを超えて何とか中間から左派へ転向する。つまり鈴木さんのあと佐々木更三の上に乗っかって、社会党の指導者、リーダーになろうという決意を持ちながら「日中共同の敵」を60年安保の闘いをめざしてやったと思います。

私が第1回に訪中したときは、浅沼さんのブロンズ像をたくさん作って、それを持って中国の全土を歩きました。たいへんそのブロンズ像は人気がありました。今でもブロンズ像は持っています。「日中共同の敵」というのは、そういうことによって生まれた。これは浅沼が明確に自分で判断をしてやった。だから羽田に着いたときも、彼らはひるまなかった。これは国内的にも、党内的にも批判がありましたね。北京に行ってやらなくてもいいじゃないかと……。その評判は賛否半ばだと思います。結果としてあの発言が契機となって、大日本愛国党にやられて犠牲になる非常に残念な結果でございました。

また、「天安門事件」のときは、私はもう現役ではございませんから、党の役員としてとかくはございませんが、中国とのパイプはやめてからのほうがもっと太くなるわけで、このときも活動家団を率いて行きまして、中国と色々な話をしたと思います。今から考えると、これは非常な悲劇だと思いますが、まだこの評価は中共からは出てません。

中共の評価というのは今こうなっているんです。マルクス、レーニン。(スターリンはもうだめ、)マルクス、レーニン、毛沢東。毛沢東は3対1。1は文革、だめ。これは評価は出たんだ。だから革命など三ついいことをやって、一つ失敗＝文革だ、そういう評価。これは私が言っているんじゃないくて、中国共産党自身が行っていますから間違いないですね。

あと鄧小平の段階で、キャップは3人いたんですね。胡耀邦と趙紫陽、それから毛沢東が「あなたに譲れば安心だ」と言った華国鋒。私は華国鋒と3回会った。華国鋒が、湖南省の書記から中央に来て公安部長をやった。そのときに会った。いや、もう、田舎のおじさん丸出しで、ソファーなんか座ったことがないんだ。だから人民大会堂であろうが、あの上にあぐらはいっちゃうんだね。座ってられないらしい。最初から会わせるときに、通訳をやった中央レベルの事務局が来て、「曾我先生、お行儀が悪いように見えるけれども、あれは長年の農民の癖だから、そう思ってください」。その次、行った翌年かな、そしたらさすがにもうあぐらはかなくなった。副首相か何かになっていました。

その次に胡耀邦さんに会いました。青年交流がございまして、私は日中友好の翼という団を組織して飛行機1機。(船1台はトップ同士の約束でやるというから、)じゃ、私は飛行機で行きましょうと。その頃、日中黨員協(日中社会党員党友協議会)を社会党の中につくりまし

た。私が浪人しているとき、67年か68年だ。飛行機1機で若いのを連れていきました。そのときに胡耀邦さんと会いました。胡耀邦さんという人はなかなかの人で私は約百回も中国に行っているが、中南海でご馳走になったのはそのときが初めてで1回だけです。あとはだいたい昔は万寿賓館、あるいは北京の釣魚台迎賓館か人民大会堂。中南海に入ってご馳走になったのは趙紫陽さんのときだけ。

だからこれは忘れられないんですが、民族性と国際性をうまく調和をしてやらなければならんということ、当時から強調していた人ですね。あんまりそれを強調しすぎたのと、日中友好がすぎたと。これは中曽根さんのところへ行って、多摩の奥の中曽根さんの別荘へ行ったのが批判の対象になったそうですよ。だから日中友好のやりすぎじゃないか、と言われていました。当時は胡耀邦、胡啓立、胡錦濤の「三胡」として青年団あがりの3人が、これが共産党をつないでいこうと言われて。胡啓立というのは、天津市長から中央に上がった人で、天津市長の頃から私がいちばん仲良くしていた人です。これは本当に「おれ、おまえ」ぐらいの関係になった。この人が跡を継ぐだろうと思ったら、この人は結局、趙紫陽さんの下で天安門事件に引っかかった。罰せられはしなかったが、運輸大臣かの閑職のほうへ行ってしまって党の中央から降りた。それまでは胡耀邦、胡啓立、胡錦濤と三胡と言われていたのですが……。

これは皆さんもご存じだけれど、胡錦濤さんはチベットの書記をやり、貴州省の書記をやって、ちょうど天安門のときは確かどちらかの書記だった。それで難を免れた。そうでなかったら胡錦濤さんも、あるいは主席になれなかったかもしれない。つまりその三胡を、実際に動かしたのは鄧小平さん。鄧小平さんがセカンドにいて、一度もファースト、トップにならない。

いつも2位のところにいるんです。そして実際は動かしてやったわけね。この3人は、みんな鄧小平さんの捨て駒になったともいえる。そしてその鄧小平さんも今や亡くなったし……。

いま中国の歴史を党として、正確に編纂をして出しているという仕事が共産党の中にあるんですね。そこの長ではないが、そこの副所長みたいなことをやっている人が曹欧旺という人で、中国の大使館に來ている林樞という女性の参事官の旦那なんだ。その曹さんに「鄧小平の評価はまだ出ないのか」と聞いたら、「いや、鄧小平さんの評価を出すには、先きに述べたトップ3人をどういうふうに扱うかということが出ないものだから。だいたいの調べはついているけれども、目下公式には出してない」……。

つまり、それは日本では鄧小平時代となっている。じゃ、これはまあ、いいでしょう、まあ、いい時代だ。しかしその中で「天安門」というものがあつた。じゃ、この天安門はどうかということについてはなかなか評価が出ない。これは難しいところですね。いい意味で解釈すると、鄧小平も3対1で改革開放を進め、大いに中国経済の発展をやつた。人民の生活水準を上げた。三つぐらいのいいところを挙げて、しかし天安門がまずかつた、というふうに着くのかどうか。まずかつた、ということになると、それは今度は逆に政治の民主化という話と裏表になってくる。

ただ忘れてならないことは、鄧小平さんの偉かつたのは中国にもかつて顧問委員会があつた。北朝鮮もある意味では、現役がそれで苦労している、要するに延安組です。一言でいう延安革命、聖地育ちの、その諸君がみんな下りて、それぞれ一斉に引く。引くんなら、何たって革命の当事者、大事にしてもらおう。で、顧問委員会の長は自ら引き受けた。でも、あの人（鄧小

平)が長になったのは顧問委員会だけ。顧問委員会は副にはならない。それで見ちゃいけないかもしれないけれども、江沢民にしたんだから、あの江沢民がどうやるか。いよいよだめなときには、自分たちが出て行ってやればいんだと。それまでは黙って見ていようと。自分は顧問委員会の長になって見ている。要するに長老支配といえますか、あの革命党に伴う長老支配というものを何とか排除し、やがて解散させた。これは鄧小平の大きな成果だと思います。

しかし同時に天安門を引き起こしてしまっていることと、ベトナム戦争があるんですよね。中国とベトナムの。これも訳がわからないうちに戦争をやって。何か軍の内部が分かれちゃって、当時他の軍が行かないで、鄧が革命前から非常に深くタッチした新四軍。新四軍が全部ベトナムに行っているんです、他の軍は行かない。そこがそうとうやり合って、何とかしのぎながら来た。あれは下手すると、鄧小平の失脚に結びつく瀬戸際だった。非常に難しい局面ですね。そういうもの全体を含めて、鄧小平の評価は非常に難しいのではないかと。だからいまだに正式には出てこない。

その次に江沢民の3つの代表論（先進的生産力・先進的文化・中国の最広範な人民の根本的利益）、これが新しい一つの綱領的文書になる。これは共産党の性格を変えたものですね、「資本家もいらっしゃい」というやつだから。この3つの代表論のときに実は私も呼ばれて、労働者階級の階層分化が日本でもあったので、それをやってくれ……と。

そういう話と、もう一つはヨーロッパ社会民主主義の、その本当のところを聞かせろというので、社会党本部政審の書記育ち、その後、ボン大学に勉強に行った、仲井斌君（専修大学教授）を特別団員にして行ったんです。これは2001年の中国共産党80周年記念のときの訪中

記録です。このときに中連部（中国共産党中央対外連絡部）長だったのが、有名な今度お辞めになる戴秉国（タイ・ピンクオ）。國務委員で外交、つまり主席直轄の外交小組の主任をやった人。その人が中連部長の時です。このときに仲井斌を連れて行って、思い切って社会民主主義の良さを言えと。はっきり彼はやりましたよ。最後にヒヤリングが終わってから戴さんに、夕食のときにまたしつこく質問したんだ。

下部構造が変われば上部構造が変わる。これはマルクス主義の基本だから中国もやがて複数政党制に変わるでしょうと言ったら、この戴秉国は実にうまいことを言った。中国は今でも複数政党制です。すべて与党として共に国政を担っています。榮譽を分かち合っていると。全人代じゃない、政治協商会議というものは、少数民族や、複数の党派をよんでる、そういうところだ。このところも私が説明するよりうまいこと言っている。そういうことでございまして、中国が変わるか、変わらないか、それは私にもわからないんですよ。だからあんた、10年後か20年後にまたいらっしゃいと。そうしたら中国がどう変わっているか、おのずからわかりますよ……、と言って煙に巻かれちゃったんだ（笑）。

その戴秉国さんが、実は親日家ですね。この人が今度替わるということは、ちょっと大変なんです。後釜をめぐっても新聞に出ているように、なかなか決まらない。2013年の3月の全人代で決まると思いますけれど…。(次号へ続く)

註 このあと、3月末に党中央外事工作指導小組として、組長習近平、副組長李源潮、主任楊潔篪、組員常万全（国防相）、郭声琨（公安部長）、王毅（外相）、等々に決まりました。（曾我追記：2013年7月）